

アフリカの人々と名付け 12

個を差異化する詩名と、平等制社会の原則

小馬 徹

キプシギスの詩名と性

モシとキプシギスの詩名は、共に戦士の矜持を歌う武勲詩を基に作られている。だが、その名付けの論理は「ちなみ」と「あやかり」として対照的である。対極的に典型化される時、それぞれが階級制社会と平等制社会を構造化する論理に通底して見えるのだと言えよう。

このような仮説を採用すれば、モシでは詩名が男性に限られるのに対して、キプシギスでは女性も詩名をもつ背景が理解できる。キプシギスの詩名は、「あやかり」によって類化される事で、類的な秩序である共同体への攻撃性を削ぎ落とされる。だから、キプシギスでは、女性が詩名をもつとしても、それは男性支配社会への攻撃性を意味しない。

実際、今日でも中年以上の女性は皆詩名をもっているのに、今や詩名をもつ男性はもういない。つまり、キプシギスでは、詩名はむしろ男性の間で早く腐れたのだ。詩名は、Tap-という独特の女性詩名接頭辞と結びついて、女性名として生き永らえて来たのである。

戦士引退後に名乗る詩名

ところで、キプシギスには、これまで取り上げたものとは別の、もう一つのタイプの詩名があった。それは、「屠る」という意味をもつ他動詞の原型に目的語を添えて作られる、「××を屠る」(Bar××)という特別の名前である。そして、この詩名には、性接頭辞を取らないという際立った特徴がある。

私がフィールドワークを始めた1979年には、「××を屠る」という詩名をもつ人たちの息子の世代がほぼ死に絶えていた。だから、男

性が老人になってからこの詩名を名乗った事実の他は、事情がよく掴めなかった。

ところで、古い民族誌には、キプシギスと同じく南ナイル語系カレンジン群の民族であるケニアのケイヨ人の間にもこれと同じ詩名があった事実が記録されている。

かつてカレンジン諸民族は、戦士階梯を占める年齢組が新たに形成された年齢組に戦士の地位を委譲する、「去勢牛を割く」儀礼を大々的に行っていた。だが、英国植民地政府がこれを禁じた。ケイヨでは、戦士階梯から引退して長老階梯へ移る年齢組の者たちは、この儀礼の直後、全員がそれぞれ「××を屠る」という詩名を新たに名乗った。そして、彼の兄弟以外の者は誰も、彼のそれまでのどの名前でも彼を呼べなくなったと言う[Massam, J. A. *The Cliff Dwellers of Kenya*, 1927]。

「美しく生えた草を屠る」

ケイヨの「××を屠る」詩名としてマッサムが挙げたのは、キプシギスにもある、「村を屠る」と「マサイ人を屠る」の2つに過ぎない。そこで、キプシギスのこの種の詩名とその元になった武勲詩を幾つか紹介しよう。

「羊たちを屠る」という詩名は、「羊たちを屠る／その群れの中に子牛を包み込んで広がる羊たちを」という詩から作られた。この詩と詩名は、他民族から略奪してきた羊たちの中に一頭の子牛が紛れ込んでいたという、たまさかの僥倖を嘉している。

「洞窟を屠る／コウモリとその妻がすんでいる洞窟を」という武勲詩に因むのが、「洞窟を屠る」という詩名である。或る略奪戦の時、深いブッシュに覆われ、まるで洞窟のご

とくひっそり佇む古い家が山腹にあり、一人の老人と彼の妻が住んでいた。キプシギスの他の戦士たちは皆この家を見過ごしたが、自分は目敏く発見して彼らの家畜を略奪した。その誉れをこの詩と詩名が記念している。

「禿鷹を屠る」という詩名は、「禿鷹を屠る／水を飲みおりし禿鷹を」という詩から出ている。勇猛さを名を馳せた敵の戦士がいた。しかし、彼が川で牛たちに水を飲ませている隙を狙って、まんまとその牛たちを略奪した。その武勲がモチーフとなっている。

「麗しく生えた草を屠る／ニョニョイ草は厚く茂り／マロンゲット草は赤く輝く／なれど聖なるケルンドゥート灌木は丈低し」という武勲詩は、略奪に成功した敵地の風土を叙述している。この詩から、「麗しく生えた草を屠る」という詩名が作られた。

「自称」としての「××を屠る」名

さて、「××を屠る」詩名は引退した戦士が自分自身に付けたのである。第一に注意すべきは、これが言及次元ばかりでなく、川田順造が言う意味での、つまり命名次元での「自称」である事だ。更に、一般的な詩名とは異なって、この詩名を創るのは戦士の妻ではなく彼自身である。つまり、「××を屠る」詩名は、命名主体に関しても「自称」なのだ。

したがって、キプシギスの詩名は「他称」であるとした前回までの説明を、ここで一部修正しなければならない。その上で興味深いのは、キプシギスで詩名が「自称」である事を許される条件は何かという事である。

キプシギスでも「××を屠る」詩名がケイヨと同じように用いられたのは、ほぼ確実である。もしそうであれば、キプシギスの男性が戦士の地位にある間は「自称」としての詩名をもつ事を決して許されず、戦士を引退した時に初めてそれが許された事になる。

「他称」としての「××を屠る」名

実は、女性も「××を屠る」詩名をもつ事が出来た。実際、現存の老女にはこの名をもつ人がまだいる。それは、彼女のごく幼い時に、引退した名高い戦士から母親が詩名を貰ってくれたからだ。彼女の詩名は、引退した戦士自身の「××を屠る」詩名に、女性詩名接頭辞であるTap-を付けて作られた。

そこで、次の仮説が導ける。男性の詩名の中でも、「××を屠る」名だけが性接頭辞を欠く。性接頭辞の欠如は、引退した戦士の「××を屠る」詩名が「自称」であって、他人の子供に贈られる一般の詩名のような「他称」ではない事の指標なのではあるまいか。

こう考えると、女性の「××を屠る」詩名がTap-という性接頭辞をもつ事情がよく理解できる。即ち、「××を屠る」詩名でも女性の場合は、一般の詩名と同様に「他称」である。つまり、性接頭辞の存在は、「××を屠る」詩名ではあってもそれが「他称」である事を証しているのである。

「自称」を受け入れる条件

それでは、男性の「××を屠る」詩名だけが「自称」でありえたのは何故だろうか。

戦士階梯を引退した戦士の場合、武勲詩の内容は現在ではなく過去のものだ。それは、既に再現の機会を無くした追憶か感傷でしかあり得ない。だから、彼が誇らかに自ら自分の武勲を歌いあげる行為も、またそれに因む詩名を自分自身に与える事も、いずれも個化の作用を実質的に抑制され、「『類』の秩序としての共同体への攻撃を孕む」力を既に大きく削ぎ落とされているのだと言える。

それこそが、「自称」である詩名がキプシギスのような平等制社会で容認され得る唯一の条件だったと思われるのである。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)